町史の行間

有田焼…？ 伊万里焼…？？（後　編）



鉄道によるやきものの出荷の様子（昭和初期・上有田駅）

前号では、江戸時代になぜ有田焼という名称は使われなかったのかについてお話ししました。では、伊万里焼や唐津焼と総称されていた肥前のやきものが、個別の産地名で呼ばれるようになったのはいつのことで、その理由は何だったのでしょうか？この後編では、それについて探ってみたいと思います。

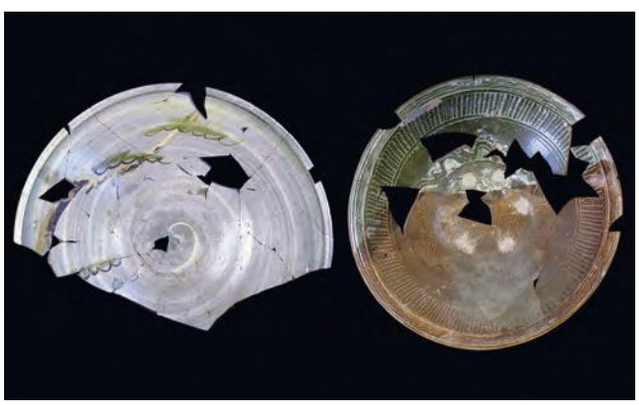
＊　　＊　　＊

時は下り明治時代のことです。同２８年（１８９５）には九州鉄道長崎線（現ＪＲ佐世保線）の武雄駅（現武雄温泉駅）が開業し、同３０年に有田駅と三河内駅が、その翌年には中樽駅（現上有田駅）および伊万里鉄道伊万里駅が新設されました。これにより、わざわざ重いやきものを遠方の港まで運ぶまでもなく、近隣の鉄道駅から大量に全国へと出荷できるようになったのです。つまり、伊万里焼は肥前磁器の総称ではなく、伊万里駅から運ばれたもの、そして、有田駅と中樽駅から出荷されたものが有田焼など、現在のように個別の産地名に変わったというわけです。

ただし、事はそう単純でもありません。波佐見や嬉野（吉田焼）には、鉄道がなかったからです。そのため、同じ磁器の産地である有田の駅まで運んで、有田焼として出荷されました。これは、高付加価値ブランドとして販売できるのですから、波佐見や吉田にとっても、かえって好都合でした。その波佐見焼や吉田焼の独自ブランド化は、実は、やきものとは無縁なことが発端でした。それは、２０００年代初頭頃に次々と発覚した、牛肉をはじめとする食品の産地・銘柄などの偽装です。これを契機として、伝統工芸品の緩い産地表示にも、公正取引委員会のメスが入ったのです。そのため、有田にとっては輸送に限らず、長らく製造工程上も密接な関係にあった両産地を切り離すしかなかったのです。

一方、陶器の方は、磁器とは少し事情が異なります。それは鉄道が走った頃にはすでに低迷し、地域の主産業としては成り立っていなかったからです。そのため、唐津焼が陶器の総称として残り続け、あえて産地名を示す場合には、市の瀬焼や弓野焼など江戸期からの窯場名が使われてきました。しかし、その転機は昭和初期前後に訪れました。それが窯跡の陶片研究ブームに基づく桃山陶の再現や、日用雑器に美を求める民藝運動による新たな付加価値の創出でした。これらを契機として、徐々に唐津焼が息を吹き返したのです。その中で、1970 年代になると、陶器生産の中心地の武雄で、「武雄焼」ブランドの確立運動が本格化し、２０１０年には江戸期の武雄産唐津焼を「古武雄」として分離することも提唱されはじめました。このように、陶器でも地区別名称が意識される時代になったのです。

この意外に複雑な産地名の由来や移り変わり、皆さんはご存じだったでしょうか？　　（村上）



武雄焼刷毛目大鉢（左：18世紀後半、右：17世紀後半）

季刊 皿山 No.151 秋 2026

有田町歴史民俗資料館・館報

夏休み子ども向け講座　　７月 29 日開催

第 13 回「歴史の川ざらい ～ベンジャラを探そう！」

今年も夏休み恒例の、「歴史の川ざらい ～ベンジャラを探そう！」を開催しました。連日熱中症が危ぶまれる気温が続いていましたが、当日は曇天で日差しも弱く、絶好の川ざらい日和となりました。今年の講座には、町内外あわせて９名の子ども達が参加しました。

やきものの町有田。町を流れる川の底には、上流の古窯跡や窯業関連遺跡などから流れ込んだ、江戸時代以降の陶片（ベンジャラ）が、無数に散在している光景がみられます。こうした陶片を、自分たちの力で見つけ、その場で学芸員に鑑定してもらうことで、有田ならではの景観に溶け込んだ歴史の一端を感じ、郷土への誇りを持ってもらおうという企画です。

最初に、教室にて、やきもののはじまりや有田焼の歴史について、また、川でどんな陶片を探せばよいかなどを学びました。現地の川では、ゲーム感覚で楽しんでもらうため、陶片は時代が古いほど高得点となるルールで、真剣に陶片探しを楽しみました。

川に入った子ども達は、じっと目を凝らし、「これぞ！」という陶片をそれぞれに見つけてきては、得点に一喜一憂していました。それでも、徐々に勘どころを押さえて、学芸員をも唸らす陶片を見つけてくる子どももいました。

子ども達が川で見つけた陶片は、貴重な文化財であるため持ち帰ることはできませんが、見つけた陶片の中から特徴のある１点を選び、元の形や製作年代等を記した解説シートを、後日各ご家庭へお届けしています。拾った陶片と解説シートは、陶器市が開催されるゴールデンウィーク期間中に旧田代家西洋館で展示公開する予定ですので、その時はぜひ足を運んでください。


事前学習


陶片探しに夢中


鑑定しています

博物館実習生がやってきました！

７月29日と、８月３日～７日の計６日間、当館で博物館実習を行いました。博物館実習とは、博物館で資料の収集や保管、展示、調査研究を行う「博物館学芸員」という専門職員の国家資格を取得するために必要な実習です。主に大学で専門科目を履修して、単位を取得する方法が一般的です。当館も大学からの依頼を受け、実習生を受入れており、今年は募集開始わずか３日で定員３名に達する勢いでした。

今回受講した３名は、長崎国際大学と八洲学園大学の学生で、基本的な博物館活動を体験してもらいました。まず、「資料整理作業」として、実際に出土資料の水に洗い・注記・実測を体験してもらいました。続いて「教育普及活動」の一環として、夏休み子ども向け講座に、指導補助として参加してもらいました。

さらに、博物館のメイン業務である「展示」体験として、自分達が行った出土遺物の整理作業の成果を、実際の展示ケースの中に再現しました。実習生たちの成果展示は、有田焼参考館で見ることができます。ぜひご覧下さい。今回の経験が、これから社会で活躍される皆さんの助けになれば幸いです。最後に、実習生の皆さんからコメントをいただいたので、紹介したいと思います。


実測作業の様子

夏休み子ども向け講座　　８月６日開催

第 25 回「有田内山の町屋模型作り教室」

この講座は、国の重要伝統的建造物群保存地区（以下、伝建地区）に選定されている有田内山の町並みについて学ぶことで、やきものの町の特異な景観や歴史に触れ、郷土への理解を深めてもらうことを目的としています。数軒の実在する町屋の模型（約２００分の１サイズ）を製作し、塀や池、庭や樹木など、さまざまな要素を組み合わせて、それぞれが思い描く理想的で独創的な有田の町並みを作ってもらいました。

子どもたちには、まず初めに文化財課職員から伝建地区の説明を受け、その後実際に現地を散策し、準備されている模型の一つでもある、国指定重要文化財の旧田代家西洋館の内部も見学しました。教室に戻った子どもたちは、実際に見て触れて感じた事からイメージを膨らませ、いよいよ模型作りのスタートです。

最初につくる１軒目の模型は、カッターの使い方に慣れることを目標にしています。そのため、切る時や組み立てる時など、とても慎重に作業していきました。しかし２軒目からは、すでにコツをつかんだのか、手際よく作れるようになり、２軒、３軒と組み立てていくうちに、あっという間に午前中が終わりました。午後からは、組み立てた建物模型を、町並みの土台に配置して、理想の町並み製作です。例年平らな土地（土台）に、建物や川、樹木や塀を配置していましたが、今年の子ども達は、独創性にあふれ、段々のある町や広大な芝や広場を配置する町、湧き水のある自然豊かな町、儀式が行われる町など、思い思いの楽しい町が、次々に完成していました。

今回の講座を通して、楽しみながら作った町並みと、有田町にある伝建地区や文化財への関心を、そして生まれ育った有田町への愛着を持ち続けてほしいと思います。



段のある広大な土地を持つ町並み



湧水と自然に囲まれた町



儀式？が行われそうな町

有田町歴史民俗資料館での実習を通して、有田焼をはじめとした有田の歴史や文化について多くのことを学びました。特に、有田町の東部がやきものづくりを中心に発展した地帯であることに対して、西部は縄文時代からつづく農業などの文化が発展した、地域の中で異なる文化が共存している珍しい特徴があることに驚きました。実習では、出土資料の洗浄や注記作業、実測など資料を扱う作業を経験しました。特に実測ではミリ単位で測り、図面をつくる細かな作業の難しさを実感しました。また、展示シミュレーションでは、企画から展示までを自分たちで行い、見る人の立場に立って分かりやすい展示を考えることの難しさや重要性を学びました。今回の経験で得た知識や学びを、今後の社会人生活にも生かしていきたいです。

8月3日から5日間、有田町歴史民俗資料館で博物館実習をさせていただきました。実習では、遺物発掘調査後に行う水洗い作業、注記、接合、実測、展示や小学生向け講座への参加など、多くの経験をさせていただきました。最も印象に残っている事は展示です。展示計画書作成においては、軸がしっかりとした趣旨を立てることの大切さ、実際の展示においては、誰もが見ても展示内容を理解できる工夫をすることの大切さを学ぶことができました。展示を一から経験できたことにより、展示に対する見方が変わり、今後博物館を訪れた際に、より充実した時間を過ごせると感じました。お忙しい中、実習生の受け入れをしていただきありがとうございました。

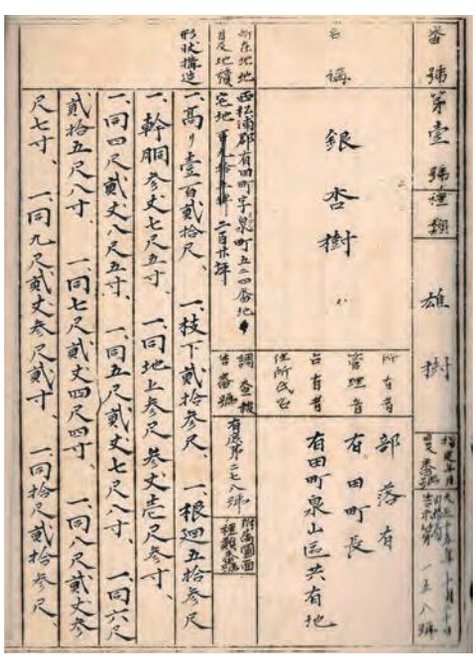
今回の博物館実習では、資料の整理・保存、展示、教育活動など、博物館の仕事を実践的に学びました。特に、出土遺物の実測作業を通して、形を正確に記録する難しさを感じるとともに、整理作業全体を通じて、地域に残る資料を適切に保存している博物館の役割を改めて認識しました。また、資料整理で学んだことを実習生同士で協力してまとめ、展示まで行えたことも印象に残っています。有田ならではの歴史に触れて得た学びを大切にし、今後も地域の歴史への理解を深めていくとともに、実習で得た経験を今後に活かしていきたいです。

「有田のイチョウ」～文化財指定から100年

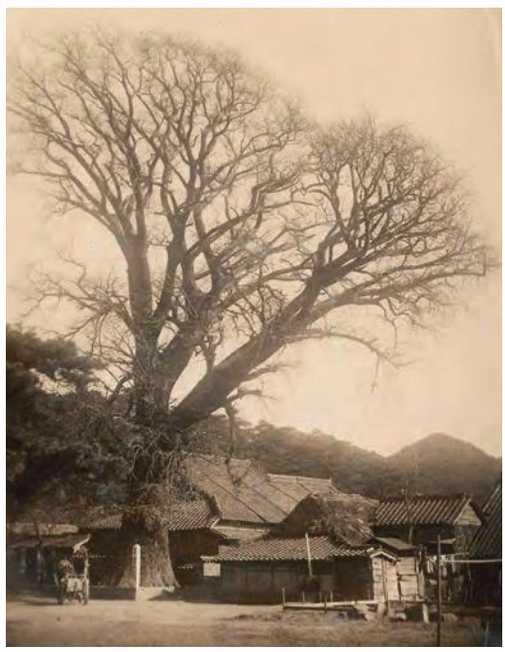
有田町泉山・弁財天社の境内にある通称大イチョウは、国の天然記念物に指定されています。その指定年月日は、大正15年10月20日、今年でなんと指定100周年を迎えます。指定時の樹齢は1000年と推測されており、つまり樹齢はすでに1100年以上ということになります。イチョウは病害虫に強く、火を受けても燃え広がりにくい性質があり、一帯を燃き尽くした有田皿山未曾有の大災害「文政11年（1828）の大火」の際も、根元に建つ屋敷だけが焼け残ったと伝えられます。

指定調書、つまり100年前の記録では、高さ120尺（1尺は約30センチメートルのため、約36メートル）、根回り53尺（約16メートル）とありましたが、平成30年に樹木医の方々に正確に測ってもらったところ、高さ30.5メートル、根回り10.4メートルという事が分かりました。いずれにしてもイチョウとしては、日本でも最大級の大きさを誇る巨木です。

この100年前の調書には面白い伝説も書かれているので、紹介したいと思います。イチョウには雌木と雄木があることを知っていますか？泉山の大イチョウは、今は実がならない雄木ですが、何と元々は実をつける雌のイチョウだったというのです。昔の有田の人は、実がほしいので雌木ばかり植えていましたが、雄木がないので実が成りません。しかしある日突然、大イチョウが雄木に変わっており、不思議に思った町の人が弁財天神社に神託を伺ったところ、大イチョウを雄の木に変えることで近隣の雌のイチョウに花粉を飛ばし、実をつけさせ、全町民をしあわせにする、というようなお告げがあったという伝説です。



大正十五年前後の大イチョウの調書（部分）


昭和九年十一月撮影
大イチョウ（泉山）

現在も有田町のシンボルとなっている大イチョウですが、老木であるにもかかわらず、毎年春には緑の葉が美しく芽吹き、秋にはその色を黄金色に替え、さらに落葉後は、じゅうたんを敷き詰めたかのような落ち葉で人々の目を楽しませてくれています。

今回、指定100周年を記念して、下記のとおり式典・イベントを計画しています。どうぞご参加下さい。

「有田のイチョウ」国天然記念物指定百周年記念

1．式　典
　日　時：11月21日（土）PM3:00
　会　場：泉山弁財天社広場（泉山公民館）
2．「有田のイチョウ」古写真展
　秋の有田陶磁器まつり期間中に
　泉山公民館で開催
3．学芸員と巡る泉山史跡ツアー
　日　時：11月21日（土）AM9:50集合
　（12:00まで）
　参加費：無料（予約不要・当日受付）
　泉山弁財天社広場にご集合下さい。

季　刊　『皿　山』

通巻151号（令和８年９月16日）
編集・発行　有田町歴史民俗資料館

〒844-0001　佐賀県西松浦郡有田町泉山一丁目4-1
☎ 0955-43-2678　FAX 0955-43-4185
URI：https://www.town.arita.lg.jp/rekishi/